

(2)その他、特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果、世界的位置付け(ISI citation など)など。* ISI データのない場合は、可能であればいろいろな指標を使って国内的位置づけを示す。

分野	取組と成果、世界的位置づけ	18年度の状況
<p>特筆すべき教育活動</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 21世紀 COE プログラムとして、医学系研究科が中心となって申請した「シグナル伝達病の治療戦略創生拠点」(拠点リーダー：本研究科 菅村教授)が平成15年度より採択されている。本拠点は、「免疫・アレルギー疾患」「がん」「糖尿病」等の疾患に対する独創的かつ先進的な治療法や予防法また診断法を開発することを目的に、医学系研究科付属創生応用医学研究センターを中核に据え、基礎生命科学から臨床医学までの研究者が領域横断的に再組織化して、先端医学科学研究の拠点を形成し、次世代のシグナル伝達病研究を担う医学研究者を養成している。 2. アジア諸国をはじめとする途上国からの留学生の受け入れの多様化を図るため、平成18年度から修士課程に農学研究科、国際文化研究科及び環境科学研究科と連携し、国際教育コースを設置し、1名の学生を受け入れた。 3. 平成16年度に採択された振興調整費「医療工学技術者創成のための再教育システム (REDEEM)」は、医工学分野における研究教育プログラムとしては本邦初のものである。 4. 本学部・研究科の教育水準の不断の向上を図るため、医学教育推進センターを設置し、専任の教授、准教授及び助教を配置し、ワークショップ形式の教員FDを複数回実施したほか、全ての科目において授業評価を実施し、アンケート報告書を作成するなど、医学教育改革の推進に向けた取り組みを行った。 5. 大学院博士課程において、全ての系統講義科目で ISTU を利用したインターネット授業を開始し、全体の6割以上を収録済みである。 6. グローバル COE プログラムとして、医学系研究科が中心となって申請した「脳神経科学を社会へ環流する教育研究拠点」(拠点リーダー：本研究科 大隅教授)が平成19年度に採択された。本拠点は、最先端の脳神経科学研究を総合的に推進し、今までにない脳神経科学分野を自ら切り開くことができる若手研究者の育成を第一の目的としている。 7. 平成19年度にがんプロフェッショナル養成プラン腫瘍専門医コースを設置し、山形大学、福島県立医科大学と教育交流協定を締結する。 	
<p>特筆すべき研究活動</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 片桐教授は肥満・糖尿病の新規治療法に繋がる肝臓発の脂肪燃焼シグナルを世界で初めて発見し、インパクトファクター30を超える世界の超一流誌(サイエンス誌)に成果が発表された。 2. 北本教授はプリオン病についての世界で7箇所(アジアで唯一)のWHOの研究協力センターとして、世界のプリオン感染対策に参与している。 3. 大隅教授は神経科学の領域で、科学技術振興機構(JST)の支援による戦略的創造推進事業(CREST)の大型研究費を得て、「ニューロン新生の分子基盤と精神機能への影響の解明」という課題を遂行している。 4. 五十嵐教授は文科省特定領域研究「遺伝情報発現における DECODE システムの解明」の領域代表者を務めており、研究者の連携強化や若手育成にも努めている。 5. 山本教授は JST 戦略的創造研究推進事業 ERATO 型研究「山本環境応答プロジェクト」の総括者を努めており、その中間評価では、「環境対応/応答機構」という生命科学の中でも最も新しい分野を扱うものであり、独創的で十分な広がりを持った構想による研究を実践しているとの高い評価を得ている。 	

	<p>6.松原教授は長らく原因が不明であった「コストロ症候群」及び世界で60例程度しか報告されていない難病「心臓・顔・皮膚症候群」について、がん遺伝子の突然変異が原因となっていることを突き止め、米国科学雑誌ネイチャー・ジェネティクスに成果が発表された。</p> <p>7.平成15年度採択の振興調整費「東北大学先進医工学研究機構(略称TUBERO)」では、医工融合的医療の開発と若手研究者養成を重点的に進めている。</p> <p>8.医学系研究科附属創生応用医学研究センター先進医療開発部門は、細胞移植・遺伝子治療・再生技術などの最先端の手法を用いて、これまでの医療では治療が困難であった疾患への新規治療法を目指している。医学系研究科の各分野に加え、歯学研究科、薬学研究科、加齢医学研究所、病院等から人材が集まり、これらの部局との密接な連携のもと、先進技術による難治疾患の克服に向けた研究を進めている。</p>	
<p>特筆すべき社会貢献活動</p>	<p>1.平成17年度、宮城県から地域医療についての研究を進めることを目的として、地域医療システム学講座の寄附を受け入れ、地域医療開発センターを設立し、宮城県と共同研究を進めている。平成18年3月と同年11月の公開シンポジウムで研究成果を発信した。</p> <p>2.宮城県及び仙台市からの救急医療改善に向けての社会的要請により、平成18年10月に病院に高度救命救急センターが設置され、その診療活動を支えている。</p> <p>3.佐藤教授は環境汚染物質であるPCBやメチル水銀の胎児期曝露は生後の神経系や行動の発達に影響を与えることが懸念されていることを受け、そのコホート研究が大型の厚生労働科学研究費の支援を受けている。</p> <p>4.辻教授は高齢化社会に迎えるにあたって在宅高齢者の健康寿命(心身ともに自立して暮らせる期間)を測定し、高齢者における心身機障害の発生と重度化の課程を明らかにするべく仙台市宮城野区鶴ヶ谷地区の住民約1,200名に対して心身機能に関する総合的な機能評価を実施し、その後の健康・障害に対する影響を追跡している。(鶴ヶ谷プロジェクト) 永富教授は同プロジェクトにおいて健康増進・介護予防プログラムを実施している。</p> <p>5.永富教授は高齢化率が30%を超えた福島県西会津町の高齢者の介護予防のための筋力トレーニングプログラムを提供し、町の5カ年計画「100歳への挑戦パート」を支えている。</p> <p>6.東北大学サイエンスカフェ 本研究科押谷教授により平成18年1月13日に開催した「鳥インフルエンザの流行と新型インフルエンザ出現の可能性」、本研究科松原教授により平成18年3月17日に開催した「遺伝子医療の最前線～遺伝子のはからだの設計図～」に引き続き、本研究科大隅教授等により「脳をつくる遺伝子レシピ!」を平成18年6月30日に開催した。</p> <p>7.宮城県から特別授業の提供依頼があり、仙台第二高校など県内の高校で本研究科・学部教員による特別授業を平成18年5月27日、10月30日、12月7日に開催した。</p>	